

ポスト京都議定書を巡る多国間交渉  
—規範的アイデアの衝突と調整の政治力学—

2014年3月

政策研究大学院大学

角倉 一郎

本論文は、2007年から本格的な交渉がスタートし、2011年のダーバン会議で基本合意が成立した、いわゆるポスト京都議定書（地球温暖化防止に関する京都議定書に基づく排出削減義務期間（第1約束期間）が終了する2013年以降の国際枠組みの在り方）を巡る多国間交渉について、二酸化炭素などの排出削減に関してどの国がどのような責任を負うべきかという規範を巡る政策アイデア（規範的アイデア）の衝突と調整という側面に着目して、その政治力学を規範的アイデアの妥当性の作用の観点から分析した事例研究である。

第1章では、ポスト京都議定書を巡る多国間交渉の政治力学を左右する要因として、パワーや経済的利益の要因、リーダーシップなどの要因に加えて、各国の主張の妥当性も重要な要因として作用したのではないかとの問題意識が提示される。そして、こうした問題意識を踏まえて分析を行うため、国際関係における規範やアイデアの作用、説得と討議のプロセスなどに関する先行研究を踏まえ、①規範的アイデアの衝突と調整、②規範的アイデアの妥当性の作用、③規範的アイデアの妥当性と他の要因との相関の三つの分析視角を提示した上で、2009年のコペンハーゲン会議（COP15・CMP5）、2010年のカンクン会議（COP16・CMP6）、2011年のダーバン会議（COP17・CMP7）の三つの事例について交渉の過程を詳細に追跡し（プロセス・トレーシング）、その結果を比較分析するという分析枠組みが提示される。

第2章では、第3章以降で個別の事例の分析に入る前に、ポスト京都議定書を巡る一連の多国間交渉がどのような背景と構造の下に展開したのかについて概観し、世界全体の二酸化炭素排出量の3割しかカバーしていない京都議定書の実効性の限界やこれまでの交渉の経緯、気候変動枠組条約締約国会議（COP）・京都議定書締約国会合（CMP）での交渉プロセスの特色、主要国・主要交渉グループの基本的な立場などが説明される。

第3章から第5章までの各章においては、2009年のコペンハーゲン会議、2010年のカンクン会議、2011年のダーバン会議の三つの事例を時系列に沿ってそれぞれ取り上げ、その交渉の過程と結果を詳細に追跡した上で、規範的アイデアの衝突と調整という観点から各事例を再構成し、いずれの国・交渉グループの規範的アイデアが優位に立ったのかが明らかにされる。

第6章においては、第1章で提示した分析枠組みに沿って、主な規範的アイデアの優劣に関し、それぞれの事例ごとに、①パワーの要因（二酸化炭素排出量に基づく発言力）や経済的利益の要因（他の主要国・主要交渉グループの核心的な経済的利益の侵害の程度）による説明可能性、②妥当性の要因の作用と他の要因との相関による説明可能性について検証が行われ、③その結果について三つの事例の比較分析が行われる。その分析結果とし

て、どの規範的アイデアを中核として合意形成を図るかの局面（規範的アイデアの衝突の局面）においては規範的アイデアの妥当性の要因が強く左右し、合意案のとりまとめに当たって他の規範的アイデアの要素をどこまで取り込むかという規範的アイデアの調整の局面においては、パワーや経済的利益の要因も重要な要因として作用したことが明らかにされた。また、一連の多国間交渉における相互学習を通じて、多くの規範的アイデアについて、その妥当性の程度を高める方向での変化・発展が明らかにされた

さらに第 6 章では、本論文の学術的意義として、①規範的アイデアの妥当性に注目することにより、多国間交渉の結果についてより厚みのある説明が可能になることを明らかにした点、②国際レジームの形成・維持・発展において、規範的アイデアの妥当性の要因が強く作用する局面と、パワーや経済的利益の要因が強く作用する局面が異なることを明らかにした点、③国際レジームの形成・維持・発展を巡る多国間交渉の政治力学を分析するに当たっては、各国の交渉ポジションを定数として捉えるのは必ずしも適当ではなく、相互の説得と討議のプロセスを通じて変化しえる変数として捉えることが重要であることを明らかにした点が指摘される。また、本論文の政策的意義として、①国際レジームの形成・維持・発展に関する多国間交渉において、どのような主張を展開するかを検討するに当たっては、主張の妥当性、特に先行規範との整合性も十分に考慮する必要があること、②先行規範を盾に国際レジームの発展を妨げようとする新興諸国への対応に当たっては、新興諸国と問題意識や価値観の共有を深めていくことが重要であること、③様々な環境・エネルギー技術を有する日本は、技術で貢献する攻めの姿勢と具体的な実績を積み上げ、実効性のある対策に裏打ちされた国際枠組みを提唱することで、その存在感を高めることができると考えられることが指摘される。